

子どもの創造的な音楽学習を考える

- 「どんぐりになる」という音楽的表現の事例分析を通して -

岡本 拓子

(高崎健康福祉大学短期大学部)

I はじめに

日常の保育の中での子どもたちの生活を見ていると、様々な場面でかれらは保育者と関わりながら、豊かな音楽的表現を行っている。そのような場面では、保育者は子どもたちが「正しい音程で歌っているか」とか、「正しくリズムに反応しているか」というような能力的な側面に目を向けたりせず、子ども自身が純粋に音楽的なやりとりを楽しむ姿を受けとめようとするはずである。そもそも音楽の演奏の仕方や聴き方に対する「正しい」とか「正しくない」といった評価基準や、「よい音」、「よい音楽」という言葉の中に含まれる「よいもの」といった音楽的価値づけも実に曖昧なものであり、このようなとらえ方は、子ども自身の音楽的表現の結果としてあらわれてた産物としての音楽作品(product)の出来栄のみを重視したものには過ぎない。

しかし子どもがどのようにして音楽的表現を行っているかという、音楽作りの過程(process)に目を向けると、そこには子どもたち自身が、自分の周囲の環境や人びと、また音や音楽と深く関わりながら、自分なりの表現をしようとする姿がみえてくるはずである。

本研究では、このような視点から保育園の日常生活の中で子どもたちが音楽的表現をする姿をとらえ、その過程で育まれていく子どもたちの感性や想像性が、どのようにして創造的な音楽活動へと発展していくのかということを、「どんぐりになる」という音楽的表現の事例を通して明らかにすることを目的とする。

II 研究方法

筆者は1997年より約4年間、筆者が暮らしていた兵庫県加東郡東条町の東条保育園に週1回訪問し、言語習得期である1・2歳の子どもたちと担任保育者との関わりを継続的に観察してきた。そしてかれらの日常生活場面をビデオ録画および記録メモをとる自然観察法を採用し、それを元に抽出した事例について、特に音楽的表現が顕著にあらわれている場面について具体的に音楽分析を行っていった。

本研究では、その中から「どんぐりになる」というひとつの音楽的表現がみられた事例をとりあげて、子どもの創造的な音楽学習がどのようにして行われているのかについての見解を述べる。

III 事例分析 (詳細な事例については当日レジュメを配布する)

この事例は、どんぐりを取りあいして泣いてしまった子どものために、保育者がどんぐりを床にばら撒いたことに子どもたちが大喜びし、それが子どもたちの身体表現へと発展した場面である。保育者が歌い、副担任がピアノを弾く〈どんぐりころころ〉の歌にあわせて子どもたちが身体を動かしたのをみて、保育者がその表現を「〇〇ちゃんのどんぐり」と言ったことによって、「音楽にあわせて身体を動かす」という子どもの行為が、「どんぐりになる」という意味をもった身体表現へと転換されたのである。子どもたちは保育者のこの言葉かけによって、自分の内にどんぐりのイメージを作り出し、それを自分なりの方法で身体表現しようと試みる。さらに子どもたちは保育者に励まされながら、保育者の歌と言葉や、副担任の弾くピアノの音にあわせて、自分なりの「どんぐり」を表現しようとするのだが、この時の子どもの「想像(どんぐりをイメージする)」→「創造(どんぐりの動きを考える)」→「表現(実際にどんぐりになって動く)」という活動の中に、子どもの表現しようとする意欲と感性の育ちに対する主体的な「学び」の実践が見出せる。

そして子どもたちの表現しようとする意欲は、また次の子どもの想像にも繋がり、それが「今度はカエルになりたい」と言ったり「ヘビになりたい」という言葉になってあらわれる。かれらは「どんぐりになる」という活動から、同様に「音楽にあわせてカエルやヘビになりたい」という思いを副担任に伝え、この遊びはさらに発展していったのである。

この事例から、子どもたちはかれらの内で想像したことを表現しようとしているということ、そしてかれらの想像力は音楽や音楽的な言葉とあわせることによって高められているということ、そしてかれらの表現したことは、また次の想像を生んでいるということがわかる。つまり子どもたちの表現活動は、「想像」→「創造」→「表現」→「想像」という「想像と表現の循環活動」としてとらえることができる。そしてこの循環活動を繰り返す中に、子どもたちの感性が育まれていく姿をみいだすことができ、そこに音楽的な表現を用いることや音楽的な働きかけをすることが大きな影響を及ぼしていることがわかる。

保育者は副担任との連携をもちながら、子どもたちのこのような表現活動を通して、かれらの感性を豊かに育てているということ、そしてそのために音楽を有効に使用しているということがわかる。保育者たちは、子どもたちの「学び」が促進されるために様々な働きかけをしているのだが、しかし子どもたちが自らそして主体的に音や音楽と関わり、自分なりに表現しようとする意欲を大切にしているということ、すなわち保育者は、「学び」の主体があくまでも学び手である子どもたち自身であるということを理解しているということが、この事例から見出せるといえる。

Ⅳ 考察 - 保育者との音楽的なやりとりを通して子どもたちが学ぶこと

この場面のビデオを見て、園長先生は次のような興味深い話をして下さった。

「やっぱりなあ。子どもってヘビが大好きねんね。昔からずっと思ってたんですけどね。どんなにすばらしい保育もヘビにはかなわへんです。私らが一生懸命保育してて、子どもらものってきてて、『ああ、ええ活動やなあ』って思っても、そこに1匹のヘビがニョロニョロってでてきたら、もう子どもらの気持ちはヘビにいつてしまいますねん。私らヘビには勝てしませんわ」

この活動を観察していて、なぜ子どもたちが「どんぐりになる」から「かえるになる」そして「ヘビになる」と言ったのだろうかと考えていた筆者は、園長先生の話を聞いて、この音楽的表現こそ、まさに「文化に根ざしたもの」であることを実感した。

子どもたちがどんぐりになって身体表現をしている時に、音楽にあわせてピョンピョンと飛び跳ねる動作をした子どもがいたので、そこから「カエル」を想像したのだろうかと推測していたのだが、しかしなぜ「カエル」の次に「ヘビ」がでてきたのかが不思議でならなかった。ところが園長先生は子どもたちがヘビになりたいといった場面をみて、「なぜ？」ではなく、「やっぱり」と感じたのである。

おそらくどんぐりになったり、カエルになったりして身体表現をするといった活動はどの地域の園でもみられるであろう。それはこの年齢の子どもたちがアニメズムの世界に生きていると考えれば、様々な動物や事物を擬人化してなりきることは当然だからである。保育者は子どもたちが様々な動物や虫や植物などの自然と触れあうことができるように保育の環境を整える。

しかしこの園では、保育者が保育環境として準備しなくても、そのような動植物は子どもたちの身近な日

常生活の中に「当たり前のように存在しているもの」で、特別に準備されるべきものではないのである。東条町は酒米を中心とした農業の町であり、この保育園も田の真中に立っていて、その田に暮らす「カエル」もかれらの生活の中にある当たり前の環境なのである。

子どもたちにとって、カエルは身近な生き物なのであるが、それと同じくらいヘビも子どもたちの身近にいる生き物なのだそう。園長先生が言うには、カエルがいるところには必ずヘビもいるのだそうで、子どもたちがカエルからヘビを想像してそれになりたいと言ったのもうなずけるということである。

このことから、子どもたちの内的世界はかれらの生活と密着した身近なもので構成されていて、それがかれらの文化の枠組として形作られているのではないということ、その内的世界は子どもたちが人やモノと関わることを通して外への表現として生み出されるのではないかと考えた。この事例でいえば、どんぐりはその時には目に見えるモノとしてかれらの前にあつて、子どもたちは保育者や副担任の音楽的な働きかけによって、今かれらの目の前にある「どんぐりになる」ことを通して自己を表現したのだが、その表現から次のカエルを表現する、またその次に今度はヘビを表現するといったときに、カエルやヘビは目に見えるモノとしてではなく、子どもたちの内的世界に既に存在していたといえる。それはかれらが日常生活の中からかれらの内に取り込んだモノであり、どんぐりになるという表現活動をきっかけとして外にあらわれてきたのであり、保育者たちの音楽的な働きかけによって、より形あるものとして引き出されてきたのである。

このように考えていくと、音楽的表現に限らず子どものすべての表現は、目に見える表現の結果をとらえるだけでは本当の子どもの内的世界は見えてこないということがわかる。

音楽的表現を通した子どもの「学び」にとって何よりも重要なことは、子どもたちが自己の内的世界に育ったものと、かれらの音楽的経験とをいかに結びつけて構成することができるかということであり、また表現者としてのかれらの息吹きを人に伝え、人の息吹を自己内に感じながら、ともに「響き合う」ことができるかどうかにかき結するであろう。そしてこの「人の息吹きを感じながらともに響きあう」ことこそが、音楽が人の身体を通した「音楽」として立ち現れてくるために最も重要な根源的要素であり、この世に音楽が存在すること、そして人が音楽と関わることに大きな意味をもたらすのであると考える。